

# かつしかの文化財 第94号

編集・発行：葛飾区文化財保護推進委員 葛飾区郷土と天文の博物館 Tel. 03-3838-1101

文化財保護推進委員（西水元地区）

## 葛飾を駆け抜けた聖火リレー

関口 伊織

今から 55 年前、1964 年東京オリンピックの聖火リレーが区内を駆け抜けました。

10 月 10 日の開会式から約 2 か月前の 8 月 21 日にギリシャのオリンピックで採火された聖火は 9 月 7 日に沖縄に到着しその後、鹿児島・宮崎・北海道の 3 地点から、東京をめがけ 4 コース<sup>注1</sup> で聖火リレーが行われました。葛飾に聖火がやってきたのは 10 月 7 日(水)、江戸川区から聖火が引き継がれたのは新中川に架かる奥戸新橋でした。

葛飾区の聖火リレーは 3 区間で、第一区が「奥戸新橋(新中川)～本奥戸橋(中川)」、第二区が「本奥戸橋～篠原有料駐車場前<sup>注2</sup>」、第三区が「篠原有料駐車場前～(旧)堀切橋<sup>注3</sup>」で各区、正走者 1 名、副走者 2 名、随走者<sup>すいそうしや</sup> 20 名の総勢 69 名(女性 6 名)でした。

正走者と副走者は区内の企業などから、随走者は 1 区が区内中学生、2 区が一般、3 区が区内高校生から選ばれました。選考の基準は不明ですが、みな陸上などで記録を残す選手だったそうです。聖火ランナーたちは、歩幅を揃え、列を正して走るために蔵前橋通り<sup>注4</sup> で練習を行いました。

そして、迎えた当日は生憎の雨交じりの天気だったそうですが、沿道には聖火リレーを一目見ようと大勢の観客が集まりました。その中を聖火ランナーたちは駆け抜け、聖火を引き継ぐ重責を果たしました。ランナーの方は、重責を務めたことを誇りに思い、当日着たユニフォームや授与された記念品を、今でも大切に保管されています。

さて、東京 2020 組織委員会から東京 2020 オリンピック聖火リレーの概要が 6 月 1 日に発表されました。それによると葛飾区で聖火リレーが行われるのは 2020 年 7 月 20 日。区内のコースはまだ発表されていませんが、前回とは逆に足立区から引き渡された聖火を江戸川区へと引き継ぐことになるそうです。



奥戸新橋をスタートした聖火リレー（写真提供：古渡 潔 氏）

注 1) 北海道からは 2 つのコースがスタート。

注 2) 奥戸街道から平和橋通りを通り、四つ木中学校入口交差点付近まで。

注 3) 平和橋通り妙源寺前交差点からラッキー通り商店街を経て、現堀切よりやや下流にあった旧堀切小橋と堀切橋の中土手まで。

注 4) 上一色橋(新中川)が昭和 42 年(1967)、平井大橋(荒川・中川)が昭和 41 年(1966)に竣工するまで、盲腸線で車の往来が少なかったためと思われる。

# 蚊とハエをなくせ！

## ～首都美化運動～

葛飾区郷土と天文の博物館 専門調査員 勝田 真幸

### 【はじめに】

東京2020オリンピック・パラリンピックまで1年を切りました。各競技場の整備が急ピッチで進められ、国や都を中心とした自治体でも交通網などのインフラ再整備が行われています。

また、昨年成立した改正健康増進法が来年4月に全面施行され、努力義務だった受動喫煙防止が義務化されます。

### 【1964年東京オリンピック】

55年前の東京オリンピックでは、首都高の整備や東海道新幹線の開業などの交通インフラ整備をはじめとして、競技施設や宿泊施設の建設が行われました。これらのインフラや施設の多くは今でも現役で、来年のオリンピックで使用される競技施設もあります。

また、今回の受動喫煙防止のような社会体制の変化もありました。その1つが首都の美化でした。

### 【昭和30年代の東京】

太平洋戦争の戦後混乱期と復興期であった昭和20年代が終わり、昭和30年代へ入ると、昭和31年(1956)7月の経済白書で宣言された「もはや『戦後』ではない」が流行語となったように、高度経済成長期へと突入していきました。

その一方で工業の発展は、工場から出る排煙や排水による環境汚染の原因となり、水俣病に代表される公害病が問題となりだしたのもこのころです。

### 【汚染都市東京】

現在、東京の道端にゴミが投棄されているという光景はあまり見かけません。実際に、世界で最も清潔な都市というようなランキングでも必ず上位に入ってきます。ところが、昭和30年代までの東京は、今から想像もつかないほどに汚れた都市でした。

ゴミの不法投棄や、下水道の普及率が低かったことで生活排水や工業廃水が河川や側溝に垂れ流しされていたので、悪臭はもちろん大量の蚊・ハエなどの発生に悩まされていました。この状況は、戦後復興期～高度経済成長期へと移行

していく中で、都市部への人口増加とともに悪化していく一方でした。

### 【首都美化運動】

この状況を打開するため、東京都は昭和29年(1954)、「街をきれいにする運動(首都美化運動)」を実施します。この背景には、昭和27年(1952)にオリンピックへ復帰し、1960年ローマ大会へ招致の立候補をしていたことが考えられます。

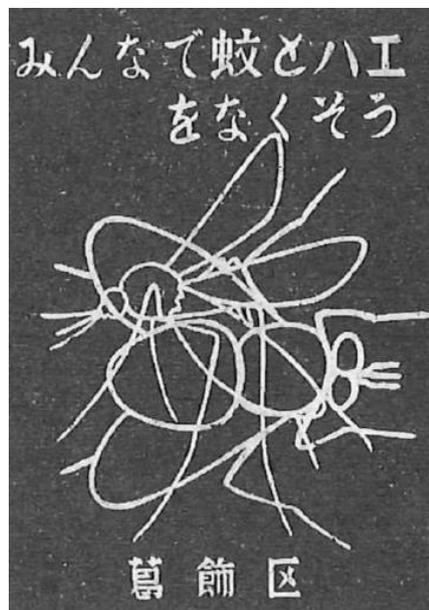
葛飾区でも都の呼びかけに応じ、区長を会長とする推進連絡協議会が設置され、観光協会・商工会連合会・青年会・婦人会・学校関係者の代表が委員に就任しました。同年8月6日の『葛飾区のお知らせ』(現広報かつしか)では、区民への呼びかけとして、「道路・公共施設・空き地・下水に紙くずやゴミを捨てないこと」「ゴミの排出量を減らすように」という内容が書かれています。

### 【蚊とハエをなくせ！】

昭和29年に始まった首都美化運動は翌年、「蚊とハエのいない生活実践運動」が閣議決定されたことで、「蚊とハエをなくす都民運動」として展開します。

葛飾区でも昭和31年度に50万円分の薬剤を購入し散布したほか、4月下旬に「春の大掃除」を呼びかけています。(参考：国家公務員大卒初任給9200円)

(4ページに続く)



「蚊とハエをなくす区民運動」を続けています。

「蚊とハエをなくす区民運動」を続けています。

「蚊とハエをなくす区民運動」を続けています。

「蚊とハエをなくす区民運動」を続けています。

「私たちのまちから蚊とハエをなくそう」

昭和39年4月10日『葛飾区お知らせ第129号』より

## 金蓮院と文化財

文化財保護推進委員（金町地区）

宇田川 泰弘

東金町三丁目所在の、法護山金剛宝寺と号する真言宗豊山派の「金蓮院」は、賢秀法印を開山として永正年間(1504～1520)に創建、万治元年(1658)に実盛法印が中興しました。

門末 37カ寺を数える本寺各のお寺で、天正 19 年(1591)に徳川家康から寺領 10 石を付された区内有数の大寺です。また、新四国四箇領八十八カ所霊場<sup>注1)</sup>の 31 番札所でもあります。

寛永 19 年(1642)と、享保 3 年(1718)に火災に遭いますが、それぞれ万治元年と元文元年(1736)に復興しました。旧水戸街道に石碑(道標)が現存し、昔の参道の長さに往時を追懐されます。地域の古老によれば、「10 万石の格式」が与えられ、幕府から 10 万石の大名に準じた待遇を受けたそうです。

そのような金蓮院には、「金蓮院愛染明王石像」、「ラカンマキ」、「弘法大師画像 附 厨子」<sup>注2)</sup>の 3 点の区指定・登録文化財があります。

愛染明王の石像は全国的にも多くなく、宝永 7 年(1710)銘と古い作例に属します<sup>注3)</sup>。ラカンマキ(羅漢槓)は、江戸時代の紀行文に記載が見られ、樹齢 400 年を超える大樹です。さらに、寺宝の弘法大師像は、寛永年間以来のいくたびかの火災の際に、自ら火中より舞い上がって境内の巨木(前出のラカンマキ)にとどまって災害を逃れたという言い伝えがあり、「火伏のお大師」との異名があります。



金蓮院愛染明王石像

注 1) 中川の挟んだ四ヶ領(東西葛西領、二郷半領、淵江領、八条領)の弘法大師像を巡礼する霊場で、天保12年(1841)に開創したとされる。

注 2) 順に、区指定有形民俗文化財・区指定天然記念物・区登録有形文化財。

注 3) 二十六夜待講(特定月の26日の夜に月の出を待ち、念仏を唱えたり飲食を共にする集団)によって建立。愛染明王は二十六夜待講の本尊。

参考文献：葛飾区郷土と天文の博物館『かつしかの文化財散策地図』平成24年3月

葛飾区郷土と天文の博物館ほか『かつしかの文化財50号までのあゆみ』平成21年3月

葛飾区『増補 葛飾区史』昭和60年3月

## こてじょう 饅地蔵

文化財保護推進委員（立石地区）

鈴木 敬



饅地蔵



せんべい焼きに使われる今戸焼の饅

天正年間(1573～1592)に、現在の台東区今戸で興った陶器、今戸焼。江戸時代後期の歌川広重や歌川国芳の浮世絵にも、窯から煙が立ち昇る様子が描かれています。江戸を代表する焼き物でしたが、関東大震災の被災をきっかけに今戸焼本家の白井家を残して、その大半が葛飾区の荒川沿いや中川沿いに生産拠点を移しました。

工房が移転してきた葛飾の地は穀倉地帯だったので、塩せんべい<sup>注2)</sup>の生産が盛んでした。<sup>注3)</sup>そして、せんべいの製造工程<sup>注4)</sup>において使用する素焼の饅を必要としていました。その饅の製造に葛飾の今戸焼窯元が協力していた事は郷土と天文の博物館収蔵されている饅からも明らかです。

写真は葛飾今戸焼最後の陶工であった、内山氏が制作した饅地蔵。煎餅焼饅を祠に見立てた中に地蔵を置いた遊び心たっぷりの作品です、私が「饅地蔵」と命名しました。

しかし、平成 25 年に内山氏が急逝されたため、長い歴史を育んだ新窯を使う正統的技法で焼かれた今戸焼作品は饅地蔵が最後となりました。そして、それと同時に葛飾区内から今戸焼の工房も絶えてしまいました。

注 1) 歌川広重「名所江戸百景 墨田河橋場の渡かわら竈」、歌川国芳「東都名所 浅草今戸」。

注 2) うるち米を主原料とする焼きせんべいの総称。草加せんべいが有名。

注 3) そのほか、米粉を使用するだんご等の米菓の製造も。

注 4) せんべいを焼く際に膨らんだり、反り返ってくる煎餅を何度も饅を使って押し、平らに焼き上げる。

参考文献：葛飾区郷土と天文の博物館『窯業関係資料1・今戸焼』平成18年3月

※ 2 ページから続く

(蚊とハエをなくせ！～首都美化運動～)

この運動は、オリンピックの開催が決定したことで、さらに機運が高まったとみられ、開催が決定した後の昭和 34 年(1959)7 月には、読売新聞社から葛飾区に、自動式薬剤散布機 1 台と肩掛式薬剤散布機 50 台が寄贈されています。そして、薬剤の散布量もこれに伴って増えたと思われる、翌々年度の昭和 36 年度予算には 140 万円分が計上されています。

#### 【首都美化デー】

2 年後にオリンピックが迫った昭和 37 年(1962)、蚊とハエをなくす都民運動は首都美化運動へと形を変え、毎月 10 日が首都美化デーに指定されました。

そして開催 150 日前の昭和 39 年 5 月 10 日の首都美化デーでは「オリンピックを子りとつない東京で」「1 千万人の手で東京をきれいに」の言葉が掲げられ、都内全域でパレードが行われ、美化の呼びかけと清掃活動が行われました。

さらに、総仕上げともいえる「首都美化総点検」が 9 月末から 10 月 3 日まで行われ、各戸に点検カードが配布されました。

#### 【ポリバケツ登場】

一連の首都美化運動で大きく変わったのが、ゴミの収集方法でした。それに、大きな役割を果たしたのがポリバケツです。当時のゴミ収集は、各家庭の前に設置されたコールターが塗られた木製のゴミ箱や、コンクリート製のゴミ箱からの収集でしたが、月に 2～3 度の不定期収集のうえ人力のために、対応しきれない状況になっていました。

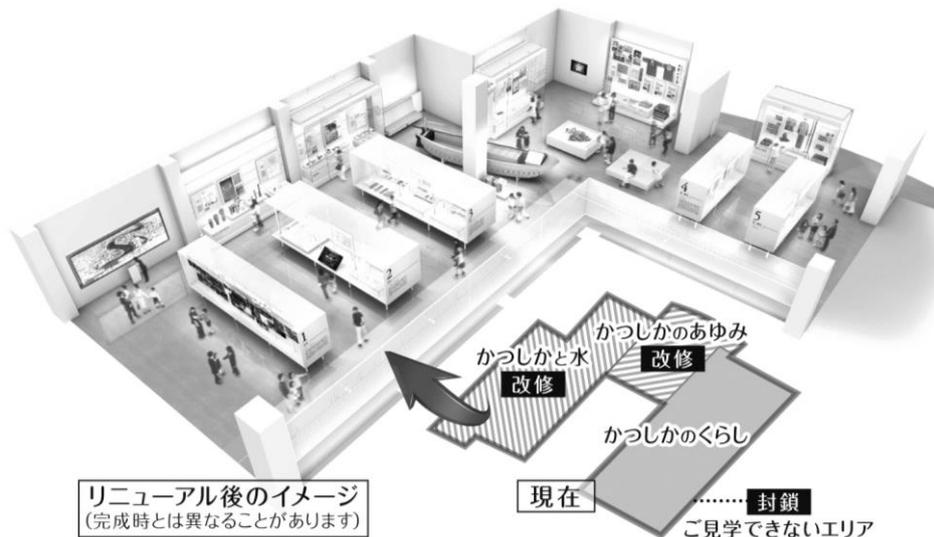
そこで、東京都はニューヨーク市清掃局長の助言を受け、運搬可能な容器を各戸に備えて定時収集する、ニューヨーク方式のゴミ収集を検討します。この計画は同年、杉並区をモデルに開始され、昭和 38 年度までに特別区全域で実施されます。一方で、各家庭や道路に備え付けられていたゴミ箱は美観を損ねるとして撤去されていきました。

#### 【おわりに】

昭和 29 年に始められ、昭和 39 年の東京オリンピックでピークを迎えた首都美化運動は、昭和 51 年(1976)まで続けられました。当時の葛飾区の広報紙からは、区と区民が協力して街をきれいにするために努力した様子が見てとれます。

## 郷土展示室改修のお知らせ

令和元年 10 月から 2 階の郷土展示室（常設展示）は大規模改修を行うため、見学できません。葛飾区の歴史を時代順にストーリー展開し、デジタル情報の活用やバリアフリー化、さらに照明や展示ケースの入替えを行い、見やすく分かりやすくします。明るく開放的で居心地の良い空間に生まれ変わりますので、お楽しみにかけてください。



なお、リニューアルオープンは令和 2 年 7 月の予定です。改修に伴い、2 階特別企画展示室および「かつしかの暮らし」エリアも封鎖します。プラネタリウムおよび天文展示室、フーコーの振り子、天体観測室は通常通りご覧いただけます。

#### 【編集後記】

『かつしかの文化財』は、区内 19 地区から推薦された文化財保護推進委員が交替で執筆を担当しています。記事の内容は、区の指定・登録を受けている文化財や、各地区の「知られざる文化財」を基本にしています。

一方で今号のオリンピック聖火リレーのような、ちょっと変わった時事ネタ等も交えています。『かつしかの文化財』の趣旨からは逸れないようにしつつも、直球一辺倒ではなく変化球も交えて読者の方に楽しんでいただきたいと思います。

(編集委員一同)